

# スロラニ通信 第12号



カンボジアで子ども達の命を守る支援  
障がい児支援 × 救急救命 × 歯科支援

スースダイ!~ごあいさつ~ スロラニプロジェクト代表 飯塚由美子

最近、世界中が災害により被害を受け、日常の生活が不自由になっています。悲しいことに亡くなってしまわれる方も多く、心痛めることが続いています。これも人間の業が招いたことなのでしょうか。

私たち、スロラニプロジェクトメンバーは、ほとんどが仕事を持っています。私含め障害児支援にかかわっている者は、災害警報が出る度に、お預かりしている利用者の方の安全を確保する事を考え、緊急時の対策マニュアルを見直したり、備蓄食品を補充したりと、日常の業務にも影響が出ています。又、救急救命士のメンバーは、災害時には出勤し、休日にはボランティアで災害の地域に支援に出かけたりと多忙を極めています。

しかしながら、カンボジアシェムリアップでは、当団体の支援を心待ちにしている子ども達が存在しています。

そして、カンボジアのスタッフパンナさん達も日本の災害に対して心配してくれています。

皆様の温かいご支援を頂きながら、スロラニプロジェクトは、できる限りカンボジアの支援を継続し発展していきたいと思っています。これからもよろしくお願いいたします。



障がいのある子ども達の可能性を信じて モンテッソーリアン 浅原奈緒子

2月に続いて2度目の参加でした。今回は大きく分けて4つの活動に参加しました。

活動初日は、スロラニ小学校の幼稚部でモンテッソーリメソッドによる首飾り製作とおやつサービスを行いました。首飾り製作では、お花の切り抜きとストローを交互に紐に通していく活動を通して、子どもたちの手指の巧緻性や集中力、意図理解の程度を把握し、今後どのようなものから子どもたちに提供していくことが適当かを考えました。多くの子どもたちは、器用で指示もよく通り、活動をとても楽しんでくれました。数名の子どもは、個別に指導することで製作を完成させることができました。今

後は、一部の子どもに対しては個別に指導しつつ、クラス単位では日本の3歳児保育程度のものから順番に提供していくことで子どもたちの発達を促していけるような手立てを考えたいと思います。おやつサービスでは、みんなで一緒におやつを食べた後、うがいをするを経験しました。うがいの経験はあるようでしたが、口腔の清潔を保つために食べ物を食べた後にうがいをする習慣はないようでした。これからの活動で、毎日の歯磨きと共に食後のうがいも習慣となれる手立てを考えていきたいと思っています。

活動2日目、障害児デイサービスでは、保護者への聞き取りと個別療育を実施しました。子どもたちは、この数ヶ月の間にも確実に成長していました。私達は保護者のニーズを受け止め、子どもたちが、日常生活のなかでできることが増えるように、これからも療育を進めていきたいと思っています。年に2回の療育で、なにができるのかを真剣に考えていかなければいけないと改めて感じました。

活動3日目、シェムリアップ師範学校では、来期より教員になる学生たちに障害とはどういうものなのかを説明しながら、カンボジアで撮りためた脳性麻痺やダウン症の子どもたちの映像を見てもらいました。その後、学生たちに障害に関するアンケートを行いました。このアンケートは、他の学校でも教員に対して行いました。この結果により、カンボジアの方の障害に対する考え方や理解度を知り、私達がどうすればカンボジアのためになることができるのかを考えていきたいと思っています。

活動最終日、ワットポー小学校を訪問しました。残念なことにキムチェン校長先生は会議で不在でしたが、副校長先生が対応してくださり、ここでも先生方へ脳性麻痺やダウン症の子どもたちの映像を見てもらいました。映像を見ていただいた後、何人もの先生から「クラスに心配な子どもがいる」と申し出がありました。そのなかのひとりの子どもに、インフォーマルアセスメントを行うことができました。その保護者とも話ができたので、自宅でもやってもらえる療育を伝えました。その他にも、先生からダウン症の子どもが小学校の近くに住んでいることを聞き、自宅を訪問しました。次回の障害児デイサービスに参加してもらえると嬉しいなと思っています。

カンボジアの活動が終わり、日本での日常が始まりました。私は自分の仕事が大好きです。もっともっと目の前の仕事を頑張りたいと思います。でも、次回もカンボジアへ行こうと思います。



スロラニ歯科部現地活動報告(2018.7.6~10) 歯科医師 大森茂樹

歯科部として10回目の現地活動には歯科医師1名、看護師1名、福祉系職員1名が主なメンバーとして参加し、看護学生が1名合流した。そのほか適宜他部門のメンバーに力を借りて歯科保健啓発活動を行った。歯科部としての活動概要は次の通り。

小学生対象の歯科保健指導：スロラニ小学校児童 約70人 師範学校付属小学校2年生 約100人

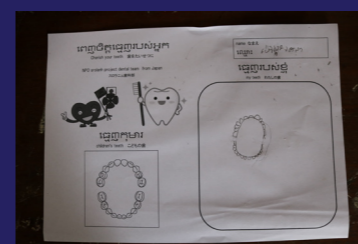
中学生対象の歯科保健指導：ドントロー中学3年生徒 47人 学生に対する歯科保健指導：師範学校学生(既卒) 約100人

障がい児口腔ケア：デイ・サービスにて9人 個別訪問 1人

個人宅での歯科啓発(ハブラシ配布)：オートチュン村 2カ所

ほぼすべての場所においてパペットを用いて口腔衛生に関する啓発の導入を行った(計8回)。

小学校・中学校では歯垢染色を施したうえで全員にハブラシを配付し、ブラッシング指導を行った。その際、手鏡を貸与し、観察を促した。



スロラニ小2・3年生では前回と同じ歯のシートを配付し、乳歯列の絵をスケッチしてもらった。自分の歯を描いてもらいたかったのだが、うまく伝えることができなかった。幼稚部の子どもたちには設定保育の延長でうがいを習慣づける試みを福祉部と連携して実施した。これは今回初めての試みで、全員で井戸に移動し、紙コップを用いて水を口に含み、ブクブクうがいをするという形式で、浅原先生主導で行った。

ドントロー中学ではブラッシング指導に先立ち、歯の健康に関心を持ってもらうための講話を前回も使用した手作りの媒体を用いて行った。ブラッシングのあとに、自分が親になったら子どもの歯の手入れをし、むし歯から歯を守ってほしいことを強く要望した。

師範学校の学生に対しては歯の生え替わりについて図示したプリントにブラッシング指導手順も記載して配付し、児童に対する指導を学生が中心となって実習してもらう試みを行った。

師範学校の学生は毎年1年次の3月に広島大学のグループに歯科の研修を受けているという情報を得ており、同じパペットも保有しているため、パペットを2体使用し、より効率的な参加型の実習を行うことができた。また、歯列模型を用いたブラッシング方法の説明も学生に行ってもらった。以前学んだ内容を理解して、子どもたちに丁寧に伝える学生の姿があった。

支援している障がい児に対しては我々による口腔ケアのほか、母親に実践してもらい、家庭での継続を促した。

障がい児デイ・サービスの場では孤児院センターで暮らす少女たちとの協力でパペットによる歯科啓発を行った。前日に孤児院に出向いて打ち合わせを行い、通訳を介さずに少女たちが日本人の指示を受けながらクメール語で演じるという初の試みを実施した。つまずきはあったが、それ以上のインパクトを与えることができたのではないだろうか。

歯科部としては前回に続き「未来の子どもたちの歯を守るためにできることを」を活動テーマに掲げて今回の活動に臨んだ。できることをできる人ができる範囲で、というスタンスで、他職種の方にも歯科の支援をバックアップしてもらった。はじめての取り組みも不十分な点はあったかもしれないが、想定を逸脱することなく実施できた。

将来教師になる学生や、将来親になってゆく中学生に、「大人になったら、子どもの歯を守って下さい」と伝え続けることが大切だと考えている。



今後も目の前の子どもたちの健康増進のみならず、未来の子どもたちの歯を守るという観点で活動を継続していきたい。

次回以降も参加メンバーによって活動内容を見直し、計画を立て直す必要はあるが、メンバーが替わることで中身に変化があるので、望ましいことかもしれない。

今回、個人的には、団体内でのコラボレーションをひとつ、また他団体との横のつながりを持ち、外部とのコラボレーションをひとつ実践することができたことに達成感を覚えた。我々からの一方通行ではなく、カンボジア人に行ってもらいたいスタイルも受け入れられたのではないかと感じている。

歯科部だけの閉鎖的な活動にしないこと、自分たちだけの独りよがりな活動にしないことを意識して、小さくてもいいから新しいチャレンジをし続けたいと思っている。

日本語ガイドをしているピッチさんのホームページが出来上がりました!!

スロラニプロジェクト、カンボジア人スタッフのパンナさんを「先輩」と呼び尊敬しているピッチさん!!我々の活動をこよなく愛し、現在障がい児支援や救急救命講習に出てくる用語を学びながら支援に同行してもらっています。本来はもちろんガイドなので遺跡観光のガイドをしています。アンコールワット遺跡観光は是非、無償で村の子ども達に日本語を教えているピッチさんをご指名して下さい!! <https://pichpichiguide.jimdofree.com/>





毎回スロラニユ小学校の子供たちの算数の基礎学力をつける方法を考え、教材を準備し持参しているが、年に2回継続支援をしているとはいえ、たった1日、しかも1時間で何ができるか…無力感でいっぱいだった。今回は、2回授業をさせてもらうことになったので、今までより少しは効果が上がる方法を考えた。

担任が2年目で教師経験が少ないにもかかわらず、2年生23人3年生22人という多人数の複式学級を任されているということを前回2月の訪問時に知ったので、何とか担任の負担を軽減しながら子供たちの学力もつけていく方法を提示したいと思った。

そこで、現在学習支援している神戸の小学校でも実施している計算カードを使った自習方法を試してみようと思った。保護者に呼び掛け、不要になった計算カード(足し算、引き算、掛け算)を寄付してもらって持参した。ただ、2、3年生45人がどの程度の計算力があるのか分からない。計算力テストをして誰がどこでつまづいて困っているのかを把握して、取り組む課題を決めようと思った。

10までの足し算引き算10問ずつ、繰り上がりあり10問、繰り下がりあり10問、という風にそれぞれ1分間で出来るかどうかのテストを作った。やり方を説明し、タイマーをセットしてスタート!指を使いながらするので、1分間で10問出来ない子がほとんど。繰り上がりのある足し算になると、サンダルを脱いで足の指まで使ってしまうというほほ笑ましい場面も。1分間では難しいので、2分に延長して実施した。

テストの結果を表にまとめて、最終日の10日(火)の午前中スロラニユ小学校へ行き、計算カードを配る。その時、一人ずつテストの結果を見ながら配るカードを変えた。この子は足し算①(10までの足し算カード)この子は掛け算カード、という風に。カードを配ってやり方を説明すると、どの子も黙々とカード学習に取り組んでいた。これまで、何度か授業をさせてもら



ってきたが、これほど静かに学習する姿は見たことが無かった。

◎やることははっきりしている ◎自分に合った教材である これがとても大事なんだと痛感させられた。

11月から、3年生は4年生になって本校のドントロー小学校に!そして2年生は3年生に、幼稚部が1年生になって3年生と1年生の複式学級になるだろう。担任は誰?「このカードは良いので使っていきたい♪」と言っていた今の担任か?



カンボジア王国シェムリアップ州において、当団体は障害児支援の必要性を感じて2011年から地道に活動を継続しています。例えば、村の各障害児のご家庭に豆乳・パン等を定期的にお配りすることで、健康状態等の把握を行い、医療的ケアや就学その他お困りのことへの支援を実施してきました。当団体は特に、貧困家庭の方を中心に支援対象としてきました。



又、定期的に年2回、障害児デイサービスをシェムリアップ孤児院センターをお借りして実施し、支援対象者のご家族に参加していただき、保護者同士がお互いに共感できる場面を設定しています。デイサービスでは、孤児院センターの子ども達も加わり、絵画教室、人形劇、スキンシップ遊び、ゲーム大会、ダンスなどの楽しい企画や、歯科支援、洗体支援も実施しています。当団体が支援している障害のある子ども達です。現在は10名程度を限度とし、ダウン症候群、知的障がい、身体障害、てんかん、内部疾患があります。

ここ数年で、シェムリアップで当団体が支援していた障害のある子どもが、残念なことに、病で4名亡くなりました。日本に比べ医療体制がまだまだ整っていない中、障害のある子どもは短命であることをまざまざと見せ付けられました。特に知的障害児は、学校には行きませんが次第に勉強について行けなくなると、当たり前のようにリタイアしてしまうのが現実です。

デイサービスの際、それぞれのお母様方に本音を聞いたところ、日本のお母様達と同じく「この子の事を考えると不安で本当に辛くなる」「日本に連れて行って支援(療育など)をしてほしい」「この子より1日でも早く死にたい」等、涙ながらに訴えられました。

次に、シェムリアップの中心街に住む障がいのある子どもたちのケースです。まず、脳性まひとてんかんのあるソンボア君ですが、寝たきりと、合わせて介助の方法も知識が無く、私たちが出会ったころは、背中や臀部にひどい褥瘡がたくさんありました。薬やガーゼを渡し、治療方法をお母様に教えたことでかなり褥瘡も改善し、栄養の補助として、エンシュアリキッドを差し上げたことで、こんな風にぽっちゃりしたソンボア君になりました。又、脳性まひのトロラッチ君は、エイズに罹患しアルコール依存症のお母様と二人でバラックの家に暮らしていました。当団体が支援を始めた頃、お母様が亡くなりました。幸いなことにオーストラリア人の援助により里親に引き取られ現在は幸せに暮らしています。



ソンボア君の昔と今

パット君の例です。両親が亡くなり、妹たちが学校をやめて生計を立てていました。当団体は、義理のお兄様を説得し孤児院センターへの入所を進めました。現在、本人は大変楽しく孤児院センターで暮らしています。

私達は、そのような状況の保護者や子ども達に寄り添うことはもちろんのこと、日本で培った知恵と技術で、実際にシェムリアップに障害児支援としての、ハード面とソフト面でのさらなる一歩を踏み出す時期が来ていると確信しています。

今回のカンボジアの方の視察も、その一環としてのアクションです。貧困が第一の課題であるとのカンボジアの方の認識を、少しでも障害児支援に向けていただき、国として進めていただく事を将来の目標におきながら、今は、我々が何らかの一歩を踏み出したいと強く思っています。以上障害児支援の説明でした。

カンニングいいやん!!

スロラニユ小学校で子ども達一人一人の教育支援を行なう目的で学力テスト(算数)が行なわれました。1枚のテスト用紙に4つの項目があり1項目制限時間1分で問題を解き、最後まで出来なくても1分経てば次の項目の問題を解くというシステム。子ども達は初めて行なう手法に戸惑いながら取り組んでいた。その中で何人かの子ども達が出来る友達の答えを見ながら問題を解いていた。いわゆるカンニングである。「そりゃ〜、分かんかったらカンニングするわ!」私の率直な感想でした。普段いない日本人特別教師の出すテストになんとか取り組もうとする姿がイジらしくすら思えた。カンニングはいけないことくらい日本人なら誰でも分かっている。カンボジアの子ども達もカメラを向けるとカンニングを止めていた。駄目なことと分かっているのだろう。しかし解かないといけないうプレッシャーや恥ずかしさでいけないうことをしてしまっているのだと思う。後日、学力テストの結果を踏まえ、子ども達に学力に応じた計算カードが渡された。私はその場にいなかったのですが、映像を見て驚いた。今までにないくらい誰一人しゃべることなく問題を解いていた。そのトリックの種明かしを聞いたとき、「なるほど」と頷いた。問題と同じ計算式を計算カードから探し出し裏に書いてある答えを書くということ。「そりゃ〜集中して取り組むわ!」そのトリックの種を知ったときの感想でした。カンボジア人スタッフのバナナさんがいつも内戦で国が一度崩壊したことで、当時の子ども達に教育がなされなかったことにより、今でも村に住む40歳以上の大人の学力は低いと嘆いている。だから、その親のもとで育てられている子ども達は必然的に教育環境が脆弱になってしまう。しかし、子ども達は学ぶ意欲に満ちあふれており、自分で答えを導き出したい気持ちをサポートして、答えが分かったときの喜びを知ることで集中して勉強に取り組むことが出来るのです。頑張れ!スロラニユ小学校の子ども達!!(服部)

私たちの活動にご賛同頂ける方へ協力をお願い

スロラニユプロジェクトは継続して支援いただき、皆様のご協力によって成り立っています。活動にご賛同していただけた方に、スロラニユプロジェクトの会員になっていただき、その会費を大切に支援活動費として使わせていただきます。ご協力お願い致します。

会員の種類	個人	団体
正会員	1口1000円(月会費)	1口10000円(月会費)
賛助会員	1口1000円(年会費)	1口5000円(年会費)

\*賛助会員(個人)の年会費につきましては3口からお願いします。



救急救命講習活動報告 救急救命士 高橋茂樹

7月7日(ドントロー中学校)

今回で、5回目となる中学生対象の救命講習、7月度は、三年生ということで、一年生の時に私の講習を受講したか聞いたが、受講していなかったが、三年生ということもあり、しっかりとした生徒が多く、私の話すことにもよく理解し、実技もそつなくこなしていた。毎回思う事であるが、こちらの中学生はシャイで素直の子達が多く、私の話す言葉に真剣に耳を傾けてくれ、とても有意義な講習となった。今後も継続的に行っていきたいと思う。



7月8日(孤児院年長者)

前回に続き、年長者の、メイ・オウダム君をインストラクターとして講習にあたった。前回2月から5ヶ月間のブランクがあったにもかかわらず、孤児院年長者に対して指導をしてくれた。今後も他の年長者にもインストラクター養成を兼ねて指導にあたっていこうと思う。

7月9日午前(師範学校)

今回は、100名ということもあり、2班に分けて講習を実施する。教育者を目指す彼らは、解剖生理からバイスタンダーの行う心肺蘇生法の、重要性もよく理解し、少し中身の濃い座学と実技になった。将来教師を目指す彼らにとって、あつてはならないが、もし、目の前で生徒が倒れた場合の対応などにすぐ対応できるよう指導、受講生は真剣に耳を傾け、筆記し受講してくれた。今後も継続的に指導を続けていこうと思う。



7月9日午後(アブサラ機構)

今回で4回目となる機構への講習。今回は47名の受講者で、2時間半の時間の中で心肺蘇生法、応急処置法、搬送法など、講義と実技を交え、指導にあたった。午後からの講習ということで、午前中炎天下の中で遺跡で勤務されての受講となったことから、今回は、休憩時間をたっぷりとり指導にあたった。最後に質問の時間では、職員からの質疑も沢山あり、意識の高さを感じた講習となった。

